遊動円木

曽野綾子

冬樹社

遊動円木

昭和40年4月15日　第一版発行
昭和51年4月1日　新装第一版発行

著　者　曽野綾子
発行者　高橋直良
発行所　冬樹社
東京都千代田区神田神保町2—18
郵便番号 101　振替東京8—7757
電話　東京（03）264—0346（代表）

印　刷　三容堂印刷株式会社
製　本　凸版印刷株式会社

© Ayako Sono 1976 Printed in Japan
0093-10234-5190
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

曽野綾子自選集　遊動円木　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人間の皮　7
菊薫る　41
遊動円木　71
初めての旅　115
妙見島夕景　159
男の墓　187
卵とベーコンの朝食　205
飼育のたのしみ　239
あたたかい海　269

装画　山口威一郎

遊動円木

人間の皮

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

田中銀五郎という男を知っている人は全く違った、二種類の印象を持っている筈である。

田中銀五郎。二十九歳。痩せて、胃下垂か消耗性疾病を持っているのではないかと思わせる体格、几帳面で女性に対しても物堅い。幼時両親を失ったため、施設で育った。その故か悲しさをこらえたような表情を見せることがある。努力家であったのと子供のない叔母が僅かのお金を残して死んだという一種の幸運にめぐまれて、水産大学の前身に当たる講習所を出たが、船に乗ることを嫌い、二流の下くらいの、貿易商社に入った。知人の口ききで、下宿の近くの惣菜屋の娘と結婚後、二月(ふたつき)で、Q国駐在員として単身赴任。田中銀五郎。三十九歳。独身。通称ホアン・リエナルド。肥満体、頭髪薄い。日本語達者なるも、日本人かどうかはっきりせず。英語の他、特に広東語が達者である。長い間船に乗っていたので、冒険談から女の話まで、話題は無限である。朗らかな性格。女性の扱いはお世辞をも含めて大変うまい。しかし、すぐ肩に

手をかけたり、手の届くところを愛撫したりするので、気味悪がる女もいる。叩き殺そうとしても死にそうにないような体格に見えるが、奇妙なものを本気でこわがる。女の手袋とか、脱いだ靴下などである。そういうものを見ると、つとめて平静をよそおってはいるが、ハンケチを出して脂汗を拭いている。

田中銀五郎という男についての人々の印象は、今述べたように、二種類の全く異ったものだったけれど、それでも、それは決して同姓同名の田中銀五郎が二人いるということではなかった。田中銀五郎は（日本中に彼一人しかいないというほどの個性的な名前ではないが）あくまでひとりっきりであって、只二十九歳の時には痩せて胃下垂型であり、三十九歳の現在は非常な肥満体質になっていたというだけのことなのだ。

彼の二つの印象も、決して嘘でも偽りでもなかった。しかし筆者はあまりにも違うこの二つのイメージをつなぎ合わせることから、さし当たり話を始めるべきであろうか。

田中銀五郎は施設で大きくはなりはしたけれど、その幼年時代に、決してこだわっているわけではなかった。食欲に関してならやや悲しい思い出が多かった。もっと肉を食いたいとか、甘いものが欲しいとか、小遣銭があったならパンを買いたいとか思ったことはあるが、その他の点では、体力の伯仲した遊び仲間がいたから、決して悪い環境ではなかった。只、寮長先生というのが、一年中殆んど笑わない男で、いつも寮生たちに訓話をするのが好きだった。彼は

親切で、子供たちに何か役立つことをきかせてやりたかったのだ。

彼の話をきいていると、田中も子供心に人生は苦難に満ちたものという気がした。しかし、誠実で、忍耐強くありさえすれば、その苦難が又、必ず潮のひくように遠のくものだというのである。つまり、人の一生というものは、それほど甘っちょろく、思い通りになるものかならないものなのか、深く考えれば考えるほどわからないのであったが、寮生たちには、家庭生活というものがなかったから、こういう訓戒に反論するだけの資料も体験も持っていなかった。そして田中銀五郎も亦、心ならずも、そのような処世術は多分有効なのだろう、といつの間にか思いこむようになっていた。

彼は忍耐強く誠実に勉強して、初めは国のために死ぬことを考えていたが、戦争が終わると共に、ごく自然に、生き抜いて祖国の再建のために働くべきだ、というふうに考えを改めた。ただし忍耐も誠実も、共に陸の上にいる人間に課せられた美徳のように思えたので、彼は畑違いの貿易商社へ入った。このことについては少し説明を加える必要があるだろう。つまり揺れている船の上では、船酔いを感じないまでも、その絶えざる動揺と、二十四時間中、機械的な制約を受けて暮らさねばならないという点において、とうてい一つことに考えを集中して、忍耐と誠実というような心遣いを充分に行使することは不可能だと思えたのである。

その上、彼は船乗りに向いている性格ではなさそうであった。彼は当直（ワッチ）に遅れまいと思ったり、頭を常に明晰にしておくためには、睡眠時間を充分にとらねばならないと思うあまり、限られた時間に早く眠りにつこうとして却って不眠症になった。すると、つられて胃

も悪くなった。歯もおかしくなった。体中ががたぴしして来ると、誠実や忍耐などという言葉も、ひどく白々しく聞こえるようになる。彼はそういう心の状態を浅ましいと感じて、ついに船を下りることにしたのだった。

貿易商社に入って四、五年すると、実直な青年には、あちこちから縁談が持ち上がった。彼はそれまでにも、柄にもなく、実に何人もの娘に心を動かされていた。我ながら、少しどうかしているのではないかと思うほど、娘たちに対しては寛容であり、好意的であった。彼はそういう心をおさえるために、自分がこれほどに女性に心ひかれるのは、母親の味を知らないからだろう、と思ってみたりした。

そして挙句の果てに、何のことはない相手と、何のことはない気持で、ゴールインすることに決めたのである。

しかし彼は、自分の運命に無感動なのではなかった。二度とやりなおしのきかない何十年かの年月を、自分と一緒に歩いてくれるという女がいるのだ！ 何というすばらしいことだろう。子供が生まれたらしあわせにしてやるぞ。寒い日には一緒に牛鍋を囲むぞ！ 父親になったら、石に齧りついても長生きをするのだ。

妻はやや無口な、けれど、決して無愛想ではない女だった。彼は他人に、

「うちの女房は、右を向いていろと言ったら、三年でも右を向いてるような奴ですよ」

というふうな言い方をしたが、それはのろけであって、彼は静かな信頼に、むしろ溢れていると言ってもいいくらいだった。

しかし結婚後二カ月目に、突然、彼は麻の買付けのためにQ国駐在を命じられた。語学の才をかわれたのか、誠実と忍耐の二つの生き方を信用されたのか、小さい会社だけができる異例の人事であり、少くとも周囲の同僚たちは、そう思って祝ったり羨むような気配を見せたりした。田中銀五郎が日本に別れを告げたのは、冬の寒い朝であった。飛行機に乗る前に、まだ生あたたかい体温の残っている外套と手袋をすっぽりと脱いで新妻に手渡した。任地は熱帯の島国である。妻は一年経ったら呼び寄せてもいいことになっていた。

赴任後の彼は、首府のN市に一間きりのアパートを借りて、前任者からの事務をひきついだ。奇妙な美しさと不潔さのまじり合った土地であった。アパートの窓からは、この世に、これほどあからさまで陽気な色があったかと思うほどの爽かな青い海が拡がり、その手前の大通りを、黒い肌をして痩せこけた猿のような土地の女が、フリルのついたピンクの服などを着て歩いている。教会の内陣はスペイン時代の名残りを示す青タイルと花と蠟燭と人間の手垢でぴかぴかしており、市場では、牛や豚の頭からひずめの先まで、あらゆる部分を売っている。この国の豚は人間の糞を食料として育てられるのだ。

気温は常に摂氏二十五度以上であった。何でも強く大きくあからさまな国であった。夕焼はあたりに赤絵具を流したほどに赤く、商人は、すぐにばれるようなインチキをやり、男たちは女と見れば性こりもなくお世辞を言い、喧嘩をすれば、すぐピストルをぶっ放す。

しかし田中銀五郎は、この無頼な国が気に入った。彼は南の国や海や暑さなどというものが、体質的に嫌いではないことを自覚した。少くとも、それと対照的なもの——北の国、山、

寒さ――などの概念よりはるかにこの国の奔放な風物は彼の心をうった。

彼は英語の他に、この国の公用語になっているU語や、この市の実権の四〇％を握っているという華僑との取引きをするために広東語を覚え始めた。そのためには、彼は白人や日本人との私的な交際を一時完全に絶ちさえした。彼は下宿の女将と、昼食時には近くの安食堂のおやじと、夜はあやしげな酒場の女と、英語を話さない社会にずぶずぶと首まで浸って暮らした。

その故か、三カ月ほど経つと、彼は腰のベルトに、サングラス用の革サックを薬盒のようにつけ、この国独特のレースのアロハ風のシャツを着こみ、物腰から体臭に至るまで原地人か華僑にまちがえられることはあっても、のっけから日本人だと言われることは、めったになくなるまでになった。

仕事は初めから順調に動いた。時々本社からの返事が遅くて、じりじりするようなことや、あまりにもいい気すぎると思うような条件を吹っかけてくることはあったが、大して苦にもならなかった。日本人から比べると、この国の人間は人が良く、友達になりやすく、変なずる賢さはなかった。原地の人々は友情を重んじた取引きをした。時々ごまかしをやることはあっても、それはちょっとした間違いであって、一たん友達になったが最後、彼らは死ぬまで意識の上で友達なのである。華僑はもっとさめていたが、数字をあげて説明すれば、無理のないところで納得してくれる。むしろ腹の中で何を考えているのかわからないのは、支離滅裂な指令をとばして来る本社の連中だと、銀五郎は思う時さえあった。

変化は突然十カ月目にやって来た。香港上海銀行を通じて行なわれる筈の決済が下りなかっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com